

聖書日課 『からし種』 2024.2.18-2.25

<p>2月18日 (日)  詩編 96編</p>	<p>「国々にふれて言え、主こそ王と。世界は固く据えられ、決して揺らぐことがない」(10節)。これはバビロン捕囚から帰った人が、今も神はイスラエルを愛しておられることを確信し、喜びを表した歌のようだ。詩人はバビロン捕囚という苦い経験から、神は異邦人を憎まれるのではなく世界を支配される方であると、賛美している。</p>
<p>19日 (月)  詩編 97編</p>	<p>「神に従う人のためには光を／心のまっすぐな人のためには喜びを／種蒔いてくださる」(11節)。この詩編は神の全能の力強さを讃えている。神が光を与え、喜びを種蒔いてくださる。「神に従う人」とはどういう人のことを言うのか。神の御言葉、み国をひたすら求めていく人だろうと思う。私たちもそのような「神に従う人」となりたい。</p>
<p>20日 (火)  詩編 98編</p>	<p>「新しい歌を主に向かって歌え。主は驚くべき御業を成し遂げられた」(1節)。イスラエルの人々がバビロン捕囚から解放された時の喜びの歌。彼らにバビロン捕囚という苦難が襲った時、神はおられるのかと不信となっていたが、そこから解放されて「主は驚くべき御業を成し遂げられた」と歓喜した。私たちも主のなされる恵みを喜びたい。</p>
<p>21日 (水)  詩編 99編</p>	<p>「その聖なる山に向かってひれ伏せ。我らの神、主は聖なる方」(9節)。この「聖なる」と言う言葉は「隔てる」という意味の動詞からきているようだ。神は人間とは隔たったかたである。その神が罪人である人間を愛し、救うために自ら近づいて来られた。神は私たちと隔たった本質を持つかたであることを覚え、神を心から賛美していきたい。</p>

聖書日課 『からし種』 2024.2.18-2.25

<p>22日 (木)</p> <p>詩編 100編</p>	<p>「全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ」(1節)。「全地よ」という呼びかけで知らされていることは、神の支配は、ただ信じている者だけにではなく、神を信じない者、神に背いている者にも及んでいる、ということだ。私たちが今の時代に全地が神の支配の中にあることを覚え、全ての面で積極的に生きていこう。神を賛美して。</p>
<p>23日 (金)</p> <p>詩編 101編</p>	<p>「完全な道について解き明かします」(2節)。ここは岩波訳では「私は心を向けよう、完全な道に」となっている。私たちにとって大事なことは、どこに心をとめるかということなのだろう。何をしたら神の国へ入ることができるのかではなく、「完全な道に」心をとめることである。そこから福音に生かされる生活が始まるはずだ。</p>
<p>24日 (土)</p> <p>詩編 102編</p>	<p>「主よ／あなたはとこしえの王座についておられます」(13節)。この詩人は滅びの一步手前のような、打ちのめされた状態であった。しかし、「主よ」と祈った彼は、今はどんな状態でも神の力に目を注ぐことができた。すると、それまでの暗さとはすっかり変わって明るさを見出している。私たちが神の力に目を向けて、「主よ」と祈りたい。</p>
<p>25日 (日)</p> <p>詩編 103編</p>	<p>「わたしの魂よ、主をたたえよ」(1節)、「主はお前の罪をことごとく赦し／病をすべて癒し／命を墓から贖い出してください」(3-4節)。わたしたちは毎週の主日礼拝に「何のために」集うのだろうか。「主をほめたたえる」ためである。ちょっとした感謝、ちょっとした恵みどころではない。「命を墓から贖い出された喜び」を持ち寄り、主を共にたたえよう。</p>